新・下野市風土記

実は海が近かった栃木県

下野市教育委員会　生涯学習文化課

一か月前のこととなりますが7月21日～23日は日中でも25度を下回る気温で、朝晩は肌寒い日が続き、天気予報では梅雨明けの予報が難しいと言っていました。この気温は比較的過ごしやすい気温で、資料館などでは空調を使わないで済むことから電気料金を気にしないでいられるのはありがたいことです。

資料館見学に来てくれる小学生に「地球温暖化」という言葉を知っているか聞いてみると8割以上の子どもたちは知っていると答えてくれます。20年前にはほとんど知られていなかった言葉ですが、環境の変化とは恐ろしいものです。また、一万年前、六千年前の気温などについて話をすると大半の児童の皆さんは、驚きながらよく話を聞いてくれます。発掘調査で地面を掘り下げると一万年以上前の地層までたどり着くことがあります。皆さんは相当深く掘らないと一万年前の地層までいけないとお考えでしょうが、1～1.5メートルの深さでその時代までたどり着くことがあります。年代を知る根拠は、関東ローム層と言われる褐色土上層付近に厚さ5㎝程度の黒色の層があります。ちょうど「シベリア」と言われるパンのようにカステラの間にあんが挟まっているように見えます。この黒色層の上が田原ローム層と言われる約三～一万年前の層で、男体山が噴出した火山灰です。市内でもこの時代の遺跡が複数発見されています。地層に含まれている「花粉」を分析することで、当時どのような植物が生えていたのかが推定され、そこから平均気温などの環境を推定することができます。分析によると日光戦場ヶ原のようにササ・クマザサが群生しカラマツなどの針葉樹が生えていた様子からクルミ・クリ・クヌギ・ナラ類のドングリ・トチノキ・ブナなどに変化したこともわかります。

地球はおよそ一〇万年サイクルで氷期（氷河期）があり、約一万七千年前に最終氷期が終わり、現在は温暖な間氷期といわれています。氷期には現在より平均気温が7～9度低く南極や北極のほか高い山に雪や氷が集まって地上の水分が減ったため、海水面が現在よりも一〇〇～一五〇メートル低く日本列島はアジア大陸と陸橋によってつながっていました。これが、約一万年前に温暖化が始まり、約六〇〇〇年前ころの縄文時代前期にピークとなり、海水面が現在の海水面から2～3メートルも高くなりました。現在も渡良瀬川・巴波川・思川などが集まる渡良瀬遊水地周辺の群馬県の板倉町、栃木市藤岡町、野木町付近まで東京湾（奥東京湾）として入り込んでいました。この一帯には縄文人が残した貝塚（藤岡篠山貝塚・野木町野渡貝塚など）がありますが、ヤマトシジミに混じってハマグリ・アカニシ・カキやクロダイの骨が確認され、このことから海が近かったことがわかります。ちなみに茨城県と千葉県は霞ヶ浦や印旛沼が内湾となっており、房総半島の鋸山付近の山地を中心にほぼ島のようだったと推測されています。もし、この状況が続いていたら江戸城は今の位置でなくもっと内陸に造られ、お台場（幕末に黒船から江戸を守るための砲台）も違う場所だったことでしょう。ちなみに洪積世の最終間氷期とされる一二万年前ころは小山市の生井地区・豊田地区・出井地区・横倉新田地区が東京湾の海岸線と推定されています。

西暦一六〇〇年、関ケ原の戦い直前に奥州討伐のため家康は小山まで来ましたが、もしこの地形だったら小山で評定はできなかったことと思われます。